

日本銀行
帯広事務所長

水川 達生



つい数カ月前までは平穏だった日常が一変した。次々と増え続ける国内外の情報や日々増え続ける数字の意味に、頭はともかく、気持ちの整理が追いつかず、現実を冷静に見極められているのか自信が持てなくなってきた。しかし、決して目をそらすわけにはいかない。他でもない、新型コロナウイルスの話だ。

筆者の理解はこうだ。このウイルスは、どこから勝手にや

ってくるものではなく、ヒトが運ぶ。つまり、ヒトからヒトへと感染して広まる。感染しても、全く症状が出ない場合がある一方、急激に重症化して亡くなるケースも少なくない。有効な治療薬やワクチンはいまだ存在せず、現在世界中で研究・開発が進められているが、実用化までには相応に時間がかかる。それまでに多くの人が一気に感染

らなければならぬ医療現場全体が機能不全に陥ってしまう。このため各国では、程度の差はあれ、感染拡大のスピードを抑えるべく、人の接触や移動を制限する措置を講じている。これに伴い、経済活動は必然的に深刻な打撃を被ることとなる。

感染症対策と経済活動のバランスを取るのには簡単なことではない。医療崩壊が差し迫るとき

要があるが、特に上位に位置付けたいのは、自然災害に対する備えだ。今回のウイルスがそうであるように、自然は人間の都合に合わせてはくれない。例えば、2016年の台風被害や2年前の胆振東部地震を受けていったんは検討したものの、そのままになっているような対策があるのなら、着実に進めていきたい。さらに一歩進めて、感

明けない夜はない

し、医療機関に押し寄せると、他の病気やけがの治療にも当た

れる現状では、まずは感染拡大を防ぐための対策に最優先で取り組みざるを得ないが、同時に、それによっていや応なしに経済

的な困難に直面する事業者や個人を、国や自治体、経済関係者、それに地域住民は全力で支えなければならぬ。

優先順位という点では、足もとさまざまな制約がある中、職場や家庭でもそれを意識する必

要があるが、特に上位に位置付けたいのは、自然災害に対する備えだ。今回のウイルスがそうであるように、自然は人間の都合に合わせてはくれない。例

えば、2016年の台風被害や2年前の胆振東部地震を受けていったんは検討したものの、そのままになっているような対策があるのなら、着実に進めて

いきたい。さらに一歩進めて、感

生活に欠かせない物資やサービスの提供、ライフラインの維持に尽力する企業・行政関係者、また、不自由な生活を耐え忍んでいる市民一人ひとりも、ともに闘う同志であり、互いに励まし、感謝し合えればよい。

歴史を踏まえると、この感染症もいつかは終息するはずだ。「ポストコロナ(コロナ禍後)」の時代には、リモートワークや各種オンラインサービスの進展

など、ビジネスのあり方や社会の仕組み、人々の価値観が大きく変わるともいわれる。健康・自然志向も一段と高まることだろう。安全・安心な食の提供やアウトドア観光、再生可能エネルギーの活用を推進してきた十

勝への期待は大きい。

「明けない夜はない」。ある古典の一節が由来とされる有名な言葉だが、今改めてその意味をかみしめている。地域が丸となり、この難局に立ち向かい

かちまい 論壇

オピニオンのページ